

論文審査の結果の要旨

氏名：小 川 雄

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：徳川権力と海上軍事

審査委員：（主 査） 日本大学教授 関 幸 彦 ㊞

（副 査） 日本大学教授 博士（文学） 中 村 順 昭 ㊞

（副 査） 日本大学教授 上 保 國 良 ㊞

本論文は、16 世紀後半から 17 世紀前半にいたる近世の徳川権力について、海上軍事との関係から、その権力の特質を論じたものである。徳川権力の特質として、先行する織田・豊臣両権力やそれ以前の各地の地域権力と比べ、単体の権力体として国衆から出発し、統一権力への成長が確認できる稀有な事例であるとして、同氏はこの点から徳川氏の政治権力の特質に迫ろうとしている。従前の徳川権力の研究主眼は、時代区分の隔壁が作用し、上記の特色ある統合のプロセスを鮮明にし得ない傾向にあったと指摘し、これらの是正を課題とすることで総合的に徳川権力を探求しようとする。

その際の着眼点とは、同氏は徳川氏が戦国期以前から有していた海上軍事力をあげる。一般に戦国期の水軍に関しては海賊衆と同義に認識され、その自立性を強調するあまり、多様な存在形態が軽視される傾向にあった。しかしかかる研究動向とは別に、17 世紀の戦国期以降にあっても、海賊衆の系譜をひく船奉行を通じて徳川水軍へと編成されていくプロセスに注目すべきであること、その限りでは海上軍事力という視点から近世の段階にあっても、戦国期以来の海賊衆の力は無視できず、彼らが近世的な徳川権力のなかで如何なる形で秩序づけられ、編成されていくのかを考察の対象としている。

以上のような大きな見取り図をもとに、本論文では徳川氏が戦国大名から近世大名へと自己を変容させる過程で、どのように水軍を編成したかを検証する。徳川氏は 1560 年代から支配領域を拡大させ、1580 年代まで東海・甲信方面で大規模な領国を形成し、その段階で武田氏海賊衆の小浜氏、間宮氏、さらに知多半島の千賀氏を掌握し、自己の海上軍事力へと再結成させていったこと、それとともに伊勢海（伊勢湾・三河湾の総称）の海上勢力をも組み込むことに成功したこと、さらに 1590 年代には北条氏の没落に対応して三浦半島の三崎衆をもその配下におさめ、房総の上総衆も射程に組み込むなど、全国統一政権に向けて大きく前進するという。

そして全国政権段階に対応して、徳川の海上軍事は、規模や活動範囲を拡張させてゆくが、他方で政治秩序の安定のなかで、かつての海上軍事機能の役割もまた、変化するに至ったとする。とりわけ「鎖国」に伴って形成される沿岸警備体制の運営のうえで、かつての西国大名の海上軍事力との均衡を保ちつつ、新たな秩序を創出することを説く。

17 世紀以降、徳川権力は日本全域の領域権力を束ねる政権を確立したことで、勢力均衡を優位に保ちつつ、国際的緊張への対応のためにも、直轄の海上軍事力の整備・強化を志向することになったとする。かかる海上軍事の在り方は、領域権力と全国政権という徳川権力の二重的性格に、その本質が宿されていることを指摘する。

併せて近世徳川権力と海上軍事との関連性を考えるなかで、同氏が留意したのは東アジア世界における徳川権力の特質についてである。明清体制下での海禁政策をわが国がどう対応しようとしたのか、この問題についても新たな視角を提供しようとした。鎖国体制以前にあつて、徳川政権は元和段階でヨーロッパの旧教国・新教国を問わず、ヨーロッパ勢力の船舶の入港を肥前の長崎・平戸に限定しつつ、かつて浦賀貿易への志向は閉ざされる流れが形成されていったこと。かかる状況下でスペイン船

などの関東来航は継続されながら、次第に開から閉の体系へと対外関係が推移していったこと。その際に関東から房総方面での海上防衛のために、里見氏などが徳川体制内へと組み込まれていったこと。等々が指摘されている。

同氏の論文の眼目は研究の対象が極めて広いことが挙げられる。対象とする時代では、16世紀から18世紀初にまでおよび、中世（戦国）、近世を通覧する研究の幅が認められること。さらに対象とする地域を関東・東海地方のみならず、西国方面へと目配りしながら東アジアをカバーする雄大な構想を有している点である。とりわけ鎖国や解禁のイメージと重なる形で徳川体制を理解する傾向が強いが、初期の徳川外交の特質について、鎖国へのプロセスとは別にヨーロッパ勢力と生糸関係をめぐる交易問題など、様々な角度での切り口が構築されている。

以上の諸点から、小川氏は一国レベルでの大名権力の成長をおさえるだけではなく、より広い国際的視野のなかで近世的な大名権力の特質を議論しようとしているのである。同氏の論文の特質は近世初期における徳川権力がおかれた対外事情をふまえ、その権力の成長を海上軍事をふまえ、段階的に論じたところにある。

これらの諸点からも判断されるように、徳川権力を考察することで、国衆レベル、戦国大名レベル、そして全国政権レベルと段階を異にしつつも、それぞれの権力の成長過程で、海上軍事との相関関係を論理的・整合的に明らかにしようとしたもので、問題設定および論理構成、さらには史料操作という面において、卓越した内容を有するものであると評価できる。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 年 月 日